現象学研究に寄せる問い、期待と希望
：一教育心理学者の世界間移行と彷徨から

吉田章宏 Ph.D.
東京大学名誉教授
http://yoshidaakihiro.jimdo.com/

はじめに　私（1934－）は日本現象学会の会員である。しかし、哲学的　現象学者ではない。日本教育心理学会の名誉会員である。十歳の時、「神国日本」を信じる軍国日本の一少年として大日本帝国の敗戦と崩壊を経験した。そして、民主主義国・日本の少年に変貌した。多様な世界を巡り歩き、挫折、希望と幻滅、失望を重ねる彷徨の一生を生きた。心理学の世界に棲みついてからも、多様な小世界を巡り歩いた。四十歳の頃、「現象学的心理学」に辿り着き、「心理学を大刀」、「現象学を小刀」とする「二刀流」をもって、「教育実践の意味と構造を解明する現象学的心理学」への道を志した。が、八十四歳の今日、その志を遂げるには至らぬまま、死を目前にする初心の「現象学的教育心理学者」である。私の幻滅と彷徨の旅を背景に、将来に向けて現象学研究に邁進する諸学兄に、私の疑問、期待と希望を述べる機会をお与えくださった日本現象学会に感謝申し上げる。

自作の諺（コトワザ）に、私の思いを託したい。「井の中の蛙　大海を知らず、されど井の中を知る。大海の巨鯨　大海を知る、されど　井の中を知らず」（求道愚童）。　次の順序で、お話したい。**Ⅰ. 現象学研究に寄せる問い（学問とは、問いを学び、学びを問うこと）　Ⅱ. 心理学の世界と教育の世界で、現象学研究が置かれている情況　Ⅲ. 現象学研究に寄せる期待（当てにして待ち望むこと）と希望（未来に望みを掛けること）　Ⅴ. 私の問い、期待、希望の誕生の背景**

Ⅰ.　現象学研究に寄せる問い　「学問」とは、文字通り、「問いを学び、学びを問うこと。問い続け、学び続けること。」である、と私は考える。私は、75 歳で自由の身になり、自らの生涯の遅々たる歩みを顧みる機会に恵まれた。自らも関わる「現象学研究」へのさまざまな問いと疑問を抱くようになった。問いの多くは、現象学研究から学んだ「問い」だ。これまでの「学び」の歴史を通じて、現象学は素晴らしい学問であると確信する。現象学が獲得した人類の叡智が、広く深く多くの人々に共有され、人類の不幸の源を取り除き、その幸せの充実に貢献することを、心から祈っている。

現象学研究の営みの動機は何か？　現象学研究を営む諸学兄は、何を目指して、現象学研究を営んでおいででしょうか？この問いを自らに発する時、私は、ゲーテの『ファウスト』に描かれる「学者悲劇」を想起する。「悲劇」について、柴田翔『ゲーテ「ファウスト」を読む』（岩波書店、1985）から紹介する。第一の「学者悲劇」とは、「自分は学者として世界のすべてを知りたいと思う。しかし、人間である以上、世界のすべてを知り尽くすことはできない」（p.100）という悲劇。第二は、「学問によって仮にすべてを知りえたところで、それが自分の人生にとっていったい何の意味があるのだろうかという疑問にとらえられてしまう悲劇」（同前書、p.101）。ファウストの望みは、「世界を自分の向う側に置いて、その調和を観照的に知るのではなく、カオスであり運動である世界の中に自らの身を置き、自らの肉体存在によって世界を直観的に知ろうとする」ことである。柴田（敬称略、以下同様）は簡潔に纏める。「すべての人間が否応なしに世界の内部の存在である以上、世界の調和を上方から観ずるのは神のみに許された立場であり、人間の真実の知はカオスのなかでの直観的知としてのみありうる。個別的知識ではなく、そうした動的にして原理的な知のみが、人間の存在の意味を充たしうる実存的知である」と。これは、人間の存在の意味と、現象学研究の営みの動機とを問う「問い」ともなる。で、例えば、フッサール、ハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティ、リクール、ヤスパース、ガダマー、インガルデン、・・・、などなど、眼も眩む錚々たる先達たちの足跡を辿って現象学研究を営む皆さまは、ファウストの提起した「学者悲劇」をどのように生きておられるか？ これが、「学者悲劇」を克服できずにいる私の素朴で深刻な実存的「問い」だ。加えて、第三の問い「自分の研究と、それに費やされた人生は、他者、社会、世界、宇宙にとって、どのような意味がありうるか？」。第四の問い、「いずれ滅亡する人類にとって、自分の研究に、どの様な意味が在りうるか？」。ここでは、ただ、問うに留める。

「現象学を本当に理解する」とは？　私は、「學而不思、則罔．思而不學、則殆。」と、「知之為知之、不知為不知，是知也。」（『論語』、為政第二）、との孔子の教えを想う。また、ギュスドルフの次の言葉に衝撃を受ける。「本当にベルグソンを理解している者たちとは、ベルグソンの示した結論を繰り返す者たちではない。そうではなく、ベルグソンに倣って自分なりのやり方で、ベルグソンがなしたことに似ている何かを違った領域で行なう者たちなのである。」（ギュスドルフ、1972、p352－353）。ベルグソンをフッサール、・・、と読みかえてみる。「理解する」と「本当に理解する」と間の意味の対比が現れる。「理解する」は多種多様だ。例えば、フィンク、ランドグレーベ、エディット・シュタイン、ハイ

デガー、ガダマー、インガルデン、レヴィナス、リクール、・・・、あるいは、ベルク、ビンスワンガー、ボス、などの現象学的精神病理学者たち、あるいは、現象学的社会学の創始者 A.シュッツ、それぞれは、どのような意味で、「フッサールを本当に理解した」のであろうか。王陽明の「実行の中にのみ学問がある。行動しなければ学問ではない」という言葉も迫り来る。現象学研究の巨峰を「本当に理解する」という巨大な課題を前にして、遂に初心の登山者として終わる私は、目が眩む思いで立ち竦む。

「超越論的主観性」と「超越論的還元」を理解するとは？　次の指摘がある。「現象学を営む経験を解釈するために自然的言語を用いる場合には、われわれは世間的語義と普通の命題意味をとおして本来的に主題的な超越論的意味を理解しているのである」。で、「『意味作用の超越論的類比』は現象学的な述定的解明全体を支配しており、したがってこの類比は自然的語りの内部で可能な類比ではなく、現象学的還元によって可能となった、自然的語りの内部での類比にたいする類比なのである。」（E.フッサール／E.フィンク、1995、ｐ88）、と。更に続く。「自己の理論的経験を概念化するためには、現象学を営む自我は構成する自我の沈殿した素質としての[自然的（引用者加筆）]言語を受け容れ」て、用いなければならない。この窮状が、「現象学的述定化の不十分さの理由」となり、「また同時に頻繁な誤解のおこる根拠ともなり、読者のみならず、現象学研究者すらいぜんとしてこのような誤解にさらされている。」（同前書、ｐ89）。そこで、次の警告が発せられる。即ち、「現象学的命題が理解されるのは、超越論的命題の意味付与の状況がくりかえし反復されるとき、すなわち述定的に解明されたものがくりかえし現象学を営む直観に即して検証されるとき、そのときにすぎない」。それ故、「現象学的研究報告を単に読むだけでは現象学的理解は生まれないのであり、このような報告がはじめて、『読まれる』ことになるのは、研究そのものの追遂行においてにほかならない」と。「それを中断する者は、現象学的命題を少しも読んでおらず、自然的言語の奇妙な命題を読んでいるのであり、単なる現象を事象そのものととり、思いちがいをしている。・・・」（ 同前書、89）。ここで、重大なことは、現象学研究を構成する、自然的言語で表現された現象学的命題を「理解する」場合に、［現象学研究者以外の（引用者補筆）］読者のみならず、現象学研究者すら、現象学的命題を誤解する恐れがある、と懸念され、警告されていることだ。そのような誤解を避ける術は、自然的言語で表現された現象学的命題を「読むことを通して」、研究そのものを「追遂行」すること以外にはない、と断言されていることだ。この断言は、超越論的還元による研究の場合だけではなく、実は、初歩的な心理学的還元による「自然と人間」の研究の

場合にも、全く同様に妥当するであろう。言い換えれば、現象学的研究の「本当の理解」は、その研究の「追遂行」――いわば、「その研究遂行者の身になってみる」――を通してのみ可能なのだ、となる。この状況下では、「わかったつもり」になる危険は大きい、と言わざるを得ない。現象学研究を、さらには、「『超越論的観念論』としての現象学」を誤解することは、それと気づかれずに蔓延していると考えるべきではなかろうか？『幾何学の起源について』で指摘された学問の「空洞化」の危険と「再活性化」の必要が、現象学そのもの継承においても潜在しているのだ。諺「売家（うりいえ）と唐様（からよう）で書く三代目」。

現象学的教育心理学として、教育実践の意味と構造を解明（explicate）し「理解する」という、私自身の限定された研究目的との関連では、「超越論的主観性」と「超越論的還元」の理解は、当面は緊急ではないと、嘗て感じていた。その上、読めば読む程、錯綜する多種多様な解釈に、戸惑いを経験して来た。現象学研究者間の「現象学理解」の相互批判が在る。例えば、ラングリッジ（2016）と訳者・田中彰吾の理解の間の差異、現象学者R.インガルデンによるフッサールの「超越論的観念論」への批判（Ingarden, 2013, p21-22, n.11）、友人 Marc Applebaum（2017）の超越論的主観性に関わる実験の試み、Dan Zahavi の「相互主観性」観、「現象学的哲学体系」の「フッサール案」と「フィンク案」、等。他人（ひと）は知らず、私は「『超越論的主観性』を本当に理解」できているか？確信が持てない。

畏友・竹田青嗣（2012、p204－287）は、哲学史と、「現象学批判」の今日的情況の概観と、を踏まえて、内外の現象学者に「現象学の本質」への誤解があると指摘している。「現象学とはそもそも何であるのか」という問いを巡って百説が流布している状態ともする。因みに、同様の指摘は R.Ingarden（2013, p76. n.151／1965, s47. Fn.25）にもある。

竹田は、「現象学的還元の方法の要諦は、第一に、『主観―客観』図式を廃棄し、代わりに『内在―超越』図式をおくこと、第二に、『認識』を『客観』との『正しい一致』と考えず、『内在意識』のうちでいかに対象と世界についての“不可避”な確信が成立するか（構成されるか）を、内省によって観取しこれを本質記述すること」である（同前書、p242）とし、「フッサール現象学の根本方法を『世界確信』の構成の一般理論として理解する」ことを提唱している。私は、一方で、竹田の透徹した論旨に感嘆する。が、同時に、他方で、教育実践の解明における自らの無力への幻滅を経て、現象学的精神病理学の人間性の豊かさに感嘆、「事態そのものへ！」という現象学の志への共感、そこから誕生した私自身の現象学の学びに込めた期待は何だったかと反省と自問を迫られる。その嘗ての期待は、竹田の現象学理解により、果たして十全に満足させられるか、と心は揺れる。乞うご教示。

「＜現象＞学者」と「＜現象学＞学者」の区別は？　「現象学」に関わる多くの研究者の中には、「＜現象＞学者」と「＜現象学＞学者」の二通りの在り方を見分けることが出来る。両者とも、それぞれに存在理由が在ることは信じる。両者の間には、同一と差異が認められる。が、差異に焦点化し単純化すれば、「＜現象＞学者」は、人間の経験に現れる＜現象＞を、現象学的に研究する学者であり、「＜現象学＞学者」は、古今東西の多くの現象学研究文献を熟知し、どの文献の何処に何が書いてあるかに詳しい学者である。前者は、＜現象＞を現象学的に研究する人、後者は、＜現象学＞を学問として研究する人（吉田章宏、2017、p. 108-110）。この差異は、＜現象学＞を「生きる」と「知る」との間の差異として現われ、両者統合への願いは「二刀流」創始への懇請に結晶する。

「実践者」と「研究者」の相補関係は？　「授業を実践する」と「授業を研究する」。それぞれにおける「理解する」は？　私が具体的な教育実践・授業実践の現場の研究に参加する（1971－1981）ようになって以来、繰り返し立ち現れて来た問題がある。それは、「実践者」と「研究者」それぞれに可能な、実践と研究における独自の積極的な存在理由は何か、という問いであった。両者の間の「真に豊かな協働関係は？」との問いだ。指導的な教育実践者・蘆田恵之助（1873－1951）は書いている。「・・・私が内省をつゞけた結果、自分の体験から捉えている確実なものゝ、甚だ少ないのに気が付いたのは、我が物顔して語っていることの多くは、書物で読んだり、人から聞いたりしたものでした。・・・、人を指導し、人に説くものとしては、頗る力がよわいことを感じました。」そこで、蘆田は尊敬する師・岡田虎二郎に教えを請う。すると、岡田は応える。「『無いものが無いと信じる程たしかなことはない。真に求める心は、その無に徹しなければ、出てくるものではない。他人のものをつぎはぎして、世を渡ろうなどはずるい考えだ。無から生ずる義を、よくよく悟らなければならない』」。私の記憶でも、優れた教育実践者の多くは不言実行を尊び、蘆田のような「ものの感じ方」をする。これは、それぞれの実践と研究における確信の根拠の問題だとも言える。ちなみに、10年間に渡り、私が直接に教えを受けた教育実践者で、アララギ派の歌人・齋藤喜博（1911－1981）は「具体につけ　具体につけと　念じ来て　ようやくにして　一つの確信」の短歌を遺した。「確信」の語が注目される。例えば、「ゆりかご」という子どもの運動の指導において、「見る」と「見える」を発見し「確信」に到る齋藤の粘り強い実践の意味の解明を、私は試みている（吉田章宏、1999、p.23-37）。実践者は、日常的に生きる授業実践において、自らの心身を駆使して眼の前の子どもを「見る」ことの変化とその根拠を研究してもいる。「黙」の力の発見（蘆田恵之助）も同様で

ある。対照的に、「研究者」は、「実践者」による実践記録を読み、あるいは、実践の現場を「傍観的」、「第三者的」、「客観的」観察者として観察し研究する。が、それは、教育実践者として自らが生きた実践体験に即した研究ではない。明らかに、他者による実践の「傍観者的立場」からの研究だ。そのような研究者の研究に、原理的に、実践者自身による研究では解明できない、実践にとって何らかの重要な洞察が生まれうるか、という「問い」が生まれる。この「実践者」と「研究者」の差異と対比は、多種多様な脈絡で、通底しつつ多様な姿で現れて来る。管見によれば、「行為者言語」と「観察者言語」(D. M.　Mackay)、「主体的立場」と「観察的立場」(時枝誠記)、「現実的自己」と「観念的な自己」(三浦つとむ)、「同情的作物」と「批評的作物」(夏目漱石)、「求道者」と「認識者」(伊藤整)、「一人称、二人称、三人称の心理学」(荻野恒一)、さらに、村上英治、島崎敏樹、C.ロジャース、城戸幡太郎などの指摘した対比（吉田章宏、1977）も、さらに、安永浩、西郷竹彦、Max Scheler による指摘もある。これらは、(Adam Smith、『道徳的感情論』、2014）における「行為者（当事者)」と「観察者」と「中立な観察者」の対比とも通底する。

現象学研究に直接かかわり、フッサール／フィンクは、（１）現象学的対比、「構成する自我」と「現象学を営む自我」・「現象学的観視者」との対比と、（２）超越論的対比、「現象学の営為の実践者」と、「実践されている現象学の営為を研究する研究者」の対比（前掲書、p.101－2)、を論じている。この対比は、究極的には、「いっさいの多様な観点の綜合的統一としての絶対的学問の理念」、「生き生きとした真理の体系」という構想に繋がる。

「現象学研究」と「現象学教育」：現象学研究者における研究と教育は？　現象学研究に携わる方で、研究だけに専念し教育には全く関わらない方は極めて少ないであろう。とすると、そこには、既に「現象学の教育」の問題が立ち現れている。「現象学」を「理解する」、「誤解する」、「正しく理解する」、あるいは、「本当に理解する」ということが問題となる。人々を教育する「現象学教育の実践」と、「現象学教育の研究」、「現象学研究の教育実践」、さらには「現象学教育の現象学研究」等が立ち現れ、「現象学の現象学」、「現象学の＜教育と研究＞の現象学」の問題は、現象学研究の継続と発展にとり必然的な問題となる。

「ヨーロッパ諸学の危機」の超越論的現象学による克服は？　『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』で指摘された「危機」は、今日の世界において、既に解明され、解決され、克服された、と言えるか？　「危機は、もはや問題ではない」とか、「原理的に、危機は解決できない」とか、「危機は幻想、夢であった」とか、「危機は、『本当に理解され』ている」、とか言えるか？ フッサールの指摘した「ヨーロッパ諸学の危機」を克服する「絶対

的学問」構築の努力は今も継続されている、と言えるのであろうか？

「絶対的学問」の超越論的主観性による構築は？　「絶対的学問」の構築に向けての研究と実践は？　この問いは、「学者悲劇」の現象学による解決の可能性と現実性を問うていることになるかも知れない。しかし、専門の現象学研究者でさえ、「正しく」あるいは「本当に」理解しているとは限らないと指摘される「超越論的還元」と「超越論的主観性」、「『超越論的観念論』としての現象学」、また、「現象学における実在論」は、現象学の＜研究と教育＞の継承で「空洞化」を防ぐ努力は、現在も、適切に機能しているであろうか？

Ⅱ. 現象学研究が、心理学の世界と教育の世界で、置かれている情況

日本の学問には、外国からの「輸入品」で、いわば「借り物」、「模倣」、「翻訳と翻案の学」である場合が見られる。「模造品」の学問の特徴は、その確信の根拠と基礎を、現象学が問題とするような仕方では、問題としない点だ。残念ながら、日本の心理学における「学問」は直輸入、模倣、模造、翻案に終始しているように、私には見える。

「科学的心理学」の世界における現象学　現代の「科学的心理学」の世界で、現象学はどのように目されているか。これまでの数十年間の私の個人的経験から洞察すれば、現象学は、現代心理学の世界で、理解され好意的に受け容れられて来ている、とは言えない。現象学を学び始める 1970 年代の半ばまで、現象学以外の学問に集中していた私は、現象学への接近を、敢えて極力避けていた。その間、心理学研究者たちから聞いた、現象学への典型的コメントを回想する。「現象学って、そもそも何だ？」。「現象学って、所詮、安楽椅子に微睡む哲学者の一派だろう？」。「科学的心理学は哲学から分離独立することで今日の隆盛を築いた。今更、何で現象学なんだ？」。「現象学は、実証的データを集めて仮説を検証するという科学的研究の基本原則を守るか？」。「現象学者の言う事は難しくて、くどくて、何を言っているのかさっぱり分からない」。「現象学では、タームが正確に定義されないから難しいだけのことではないか」（或る数学者の評）。「現象学的心理学者は権威主義的だ。何かといえば、直ぐ、フッサール、・・・など権威の名を担ぎ出す」（米国の著名な認知心理学者）。「能書きはわかった。だが、あの難解なフッサールを読まなければならないのだとすれば、俺は関わるのは御免だ」（ジオルジ、A.（1990）参照）。私が 40 歳を越えた頃、心理学の先輩から受けた忠告、「その年齢で、現象学を新しく始めるのは止めた方がよい」。近年、数量的心理学と対比される質的心理学への動きがある。が、現象学的心理学は依然として少数派だ。米国での畏友・Amedeo Giorgi による 1970 年創刊の *Journal of Phenomenological Psychology* が継続刊行中とは稀有で貴重な出来事だ。諸事情の日本紹

介に尽力された早坂泰次郎のお名前は忘れ難い。近年では、IHSRC（人間科学研究国際会議)で活動する田中彰吾が嘱望される。私が学恩を被った「現象学的精神病理学の世界」の神谷美恵子、荻野恒一、霜山徳爾のお名前には後光が差している、と私は感じる。

「科学的心理学」の世界には幾つかの特徴がある。物理学、生物学、生理学などの自然科学と数学に憧れ、その進歩を模範とする思想、「自然科学主義」。自然法則、永遠の普遍法則が、理想として追究される。人間を、他者としてよりも、事物・対象の同類として、研究する。研究者自身――「私」――は、研究主題から除外される。実証主義の受容と普及と浸透で、哲学的議論の必要はとうの昔に消滅した、と看做される。「古い心理学」とその歴史は軽視される。現象学は古風とされ、懐疑され、「毛嫌いされ」、敬遠される。対照的に、最近の認知科学、AI 科学、ロボット工学、脳科学の進歩が重視される。欧米の「新しい心理学」の動向を追い求める。哲学的理論よりも、実験と観察と調査による、「客観的」数量的データの統計的分析による「実証」と「検証」が至上の価値と看做される。「『重箱の隅』の陳腐で常識的な仮説を複雑な数学的手続きで客観的かつ厳密に検証している」が、批判的外部からの酷評の言葉である。

教育学の世界における現象学　カナダの **Max van Manen** による『生きられた経験の探究』（村井尚子訳、ゆみる出版、**2011**）が、西欧の教育学における現象学の歴史と近年の動向を伝えている。雑誌 ***Phenomenology &Practice*** が新たな世界を拓いている。日本には、東京大学名誉教授・中田基昭のグループの仕事が在る。吉田が **1987** 年に創刊した『学ぶ/と/教える/の/現象学研究』の編集刊行は、中田基昭から田端健人に継承、**2017** 年に第十七号・創刊 **30** 周年記念号を公刊している。和田修二、大塚恵一、・・のお名前も懐かしい。

日本の教育実践者の世界における現象学　日本の代表的な教育実践者、齋藤喜博と、心許した畏友・武田常夫の二人のどちらも、「現象学」という言葉を、自ら進んで口にしたことはない。他の多くの教育実践者も同様である。現象学は決して周知ではない。が、現象学は優れた教育実践者の世界に親和的であり、強く必要とされている、と私は信じる。

哲学の世界での「現象学批判」の現況は、竹田青嗣（2012）が取り上げている。

Ⅲ.　現象学研究に寄せる期待（当てにして待ち望むこと）と希望（未来に望みを掛けること）

上記の情況下で、「教育実践の意味と構造を解明する現象学的心理学」への道を志す者として、期待と希望を、**現象学研究に可能な具体的研究主題の幾つか**を提案する形で述べる。

(1)「現象学の教育」の現象学研究」　仮に、(A)「現象学とは何か？」の問いをめぐって「百説が流布」しているのが現状だとして、(B)「現象学的還元」、「超越論的還元」、「超越論

的主観性」、「絶対者」、「絶対的学問」などの基本概念が難解で、その「理解」が困難で、「正しい」、「本当の」、「誤った」、「豊かな」、「貧しい」、「深い」、「浅い」、等々の「理解」が多種多様あるとして、(C)「現象学研究者にすら・・・誤解する恐れがある」として、さらに、(D) 現象学研究の「本当の正しい豊かな深い・・」理解の「世界化」により、現象学が広く世に普及し浸透することが、人類にとって積極的な意味がある、としたらなば、その現状の意味と構造を解明することこそ、現象学研究が第一に取り組むべき課題ではないか？　現象学研究の「教育」と「研究」の営為は独立でも別個でもない。なぜならば、それは、学問としての現象学の「空洞化」を防ぎ、「再活性化」を持続する「車の両輪」だからである。現象学研究が、現象学の本質を解明することを通して、現象学の学としての体系化を為し遂げ、現象学教育を充実させるならば、その営みそのものが、東西南北の諸学の研究と教育の範例となるであろう。現象学の教授学習の困難の根底に、フッサール／フィンクの指摘する如く、「指月の譬」が妥当するとするならば、その意味と構造が解明され、「比喩・アナロジー・モデル」（MAM=Metaphor/Analogy/Model）の現象学研究と教育における潜在力が、具体と抽象の間の活発な往復を促す道として、十全に発揮される必要がある。現象学と現象学的概念の教育における多種多様な「理解と誤解」の詳細が、多視点的な具体的解明で、現象学研究の本領が試され発揮されることが期待される。諸科学と諸芸術の現象学研究の組織化と体系化は必要、必須、必然的であろう。その多層化は、初等 - 中等－高等の層化を含み、一般教育における諸教科の多層化と組織化と体系化を促し、螺旋階段構造のスパイラル・カリキュラムの実現の構想（J.S.Bruner, *The Process of Education*, 1962, Harvard UP）の再活性化さえ期待される。

法華経を世に伝えんと童話を創作した宮澤賢治の高貴な志を想起した。現象学の存在、その潜在的可能性の一般社会への周知は遅れている。現象学教育の分節化と同時に多層化、組織化、統合化が望まれる。一般人の教養が豊かにならなければ、一般社会における現象学の叡智の普及も活用も困難だ。『この子らは世の光なり』（伊藤隆二、樹心社）の「この子ら」とは知的発達遅滞児たちだ。『現象学者は世の光なり』と謳う日の到来を期待する。

「〇〇象を撫でる」の諺のイメージに、「〇〇現象學を撫でる」のイメージが湧いてくる。両者に共通する「象」の文字。「撫でる」は「手を無に」だ。「現象学は巨象である」。巨象は、未だ眠り続けるのか、猛り狂って人類を破滅させるのか、それとも、柔和な複眼の叡智で、人類を救済するのか。それは、現象学研究の将来に懸っている。

(2)「教育と授業」の現象学研究　(3)「絶対的学問」(the Absolute Science)への道をめざす現象学研究　孤独な天才の

反省に次ぐ反省、「反省の反復」（前掲書、ｐ248）による超越論的主観性の生成。相互主観的現象学者共同体による構築（「三人寄れば文殊の知恵」）、という二つの道。*University*の現実は、その名を裏切って、個別諸科学の単なる「群がり」に堕したかと憂慮される。大学をその名に値する組織へと、根底から「再活性化」する働きを、現象学研究に期待する。　**(4)「相互主観性の現象学」(フッサール)の生活世界化としての現象学研究　(5)「人間の生涯の現象学」･･･　(6)「生き物の現象学」･･･　(7)「現象学的洞察の表現と受容」、「･･･の表現形式」の現象学研究　(8)「悪の現象学」、「嘘と真実の･･･」、「犯罪の･･･」、「詐欺の･･･」･･･。　(9)「戦争と平和の現象学」の･･･。**

（註）（２）以下のための紙幅が尽きた。上記の如く表題のみとし、内容は読者のご想像に・・・。武田常夫（1929－1986）の言葉、「教えないことが教育だ。教師が教えたいとねがうことをむしろ惜しんで惜しんで惜しみぬくことが教育だ」（武田常夫(1971)『真の授業者をめざして』国土社、p43）と、「黙の力」（蘆田惠之助）とを信じて、

V. 私の問い、期待、希望の誕生の背景

私の個人史は、以下をご参照あれ。吉田章宏(2017)「『教育の極意』の現象学研究：多種多様な『極意』の解明と統合への道」(http//yoshidaakihiro.jimdo.com/吉田章宏ブログ「現象学の世界」)、(http://tabata2014.blogspot.com/　田端健人ブログ)の *Phenomenology of Learning and Teaching*『学ぶ と 教える の 現象学研究』第 17 号 創刊 30 周年記念号 2017 年 2 月 100－135。

おわりに　現象学の学びから私が得た洞察：(１)生きとし生けるもの、人間の生きる「世界と私」の多種多様性。(２)多種多様な視点の間の同一性と差異性と相補性。（３）多様な視点の解明と統合、その「世界化」。そして、それが目指す(４)「超越論的主観性」による「絶対的学問」への憧れ。現象学の深化と充実と発展を志す「二刀流」の現象学研究への期待。William James(1899)”*Talks to Teachers on Psychology*”（邦訳『心理学について：教師と学生に語る』）に勝る『現象学について：教師と学生に語る』の出現を期待し希望する。

言及文献（註：Amazon で検索可能な文献は割愛し、読者にご注目をお願いしたい文献に限定した。）

蘆田恵之助（1972)『恵雨自伝』実践社（全集は明治図書から刊行）

伊藤隆二著（1988)『この子らは世の光なり』樹心社（「この子ら」は知恵遅れの子ども達）

ギュスドルフ、G.(1972)『何のための教師：教育学の教育学のために』小倉志祥・高橋勝訳、みすず書房

キーン、E.（1989/1975）『現象学的心理学』吉田章宏・宮崎清孝訳、東京大学出版会

ジオルジ、A.(1990)『翻訳「講演『現象的心理学の今日的問題』」、吉田章宏訳、『人間性心理学研究』第 8 号、3－15

ジオルジ、アメデオ.（2013/2009)『心理学における現象学的アプローチ』、吉田章宏訳、新曜社

竹田青嗣（2012)『完全解読・フッサール「現象学の理念」』講談社、「あとがきにかえて：現象学の再興」203－287

武田常夫：(1964)『文学の授業』明治図書:（1971)『真の授業者をめざして』国土社

フッサール、E./フィンク、E.(1995)『超越論的方法論の理念：第六デカルト的省察』、新田義弘/千田義光訳、岩波書店

ベルク、ヴァン・デン（1976/1972)『人間ひとりひとり:現象学的精神病理学入門』早坂泰次郎・田中一彦訳、現代社

吉田章宏（1977）『授業を研究するまえに』、明治図書：（1987）『学ぶと教える：授業の現象学への道』、海鳴社：（1995）『教育の心理；多と一の交響』、放送大学教育振興会：（1999）『ゆりかごに学ぶ：教育の方法』、一莖書房

ランドグリッジ、D.(2016/2007)『現象学的心理学への招待』田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子訳、新曜社（pp243－245）

Applebaum, Marc. (2017) The I and the We: Psychological Reflections on Husserl's Egology. In Magnus Englander ed.*Phenomenology and the Social Context of Psychiatry*. Bloomsbury, 183-204

Ingarden, Roman (2013) Controversy over the Existence of the World, vol.I. Tran.& annot. by A.Sxylevicz. Peter Lang. : (1964) Der Streit um die Existenz der Welt. I. Exisntentialontologie, Max Niemeryer